

社会主義モンゴルにおける女性に関する人類学的研究-男女の役割分業の実態から分析して-

著者	Turmunh Odontuya
号	8
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	学術(環)博第136号
URL	http://hdl.handle.net/10097/59027

	トゥルムンフ オドントヤ
氏 名	Turmunh Odontuya
授 与 学 位	博士（学術）
学 位 記 番 号	学術（環）博第136号
学 位 授 与 年 月 日	平成23年3月25日
学位授与の根拠法規	学位規則第4条第1項
研究科，専攻の名称	東北大学大学院環境科学研究科（博士課程）環境科学専攻
学 位 論 文 題 目	社会主義モンゴルにおける女性に関する人類学的研究 —男女の役割分業の実態から分析して—
指 導 教 員	東北大学教授 瀬川 昌久
論 文 審 査 委 員	主査 東北大学教授 瀬川 昌久 東北大学准教授 高倉 浩樹 東北大学准教授 上野 稔弘

論 文 内 容 要 旨

本研究では、社会主義モンゴル社会を経験したモンゴル人女性を研究対象とし、女性たちにとって社会主義モンゴルはどのような社会であったのか、女性たちはこの社会をどう生きてきたのか、この社会を生きることはどんな経験であったのか、女性の役割分業の側面から取り上げ、検討した。

序論では、まず従来の研究において(1)モンゴルの社会主義社会に関する人類学的研究、(2)モンゴル女性に関する研究、(3)男女の役割分業に関する研究の3点からまとめ、本研究の課題を設定し、特徴を挙げた。

第2章では、社会主義モンゴルの女性を研究対象としていることから、それ以前のモンゴル社会、いわゆる伝統的モンゴル社会における男女の状況に関して分析を行った。まず伝統的モンゴル社会では、男女の間に役割分担はどう担われていたのか、文献資料に基づいて取り上げ、整理した。その上、伝統的モンゴル社会の居住空間、生産業、社会関係における男と女、男女の役割分業に関して再検討を行った。

第3章では、社会主義時代に牧畜業に従事し続けた牧民女性の役割分業に焦点を当て、分析を行

った。具体的に、社会主義体制の下で行われた牧畜集団化が牧民女性の役割分業に与えた影響に関して、牧民が結成する生産小集団の構成・機能的類似点に着目し、考察した。伝統的モンゴル社会ではいくつかの牧民世帯が空間的に近接し、ホトアイルの共同体を結成し、共同分業によって家畜を管理した。しかしホトアイルの共同体が牧畜集団化によってネグデルの生産小隊に編成されることになった。この組織的变化による牧民女性の役割分業への影響に関して家畜管理、男女共働きのイデオロギー、世帯間の関係の観点から取り上げ、検討した。

第4章では、社会主義時代、社会にイメージされた「あるべき理想の女性」、「あるべき理想の職業婦人」に関して、当時刊行された女性向けの婦人雑誌を取り上げ、雑誌の表紙に記載された写真や絵、紙面に掲載された記事内容から分析した。婦人雑誌を社会主義前期(1925年～1936年)と、後期(1960年～1989年)の刊行に分け、分析を行った。前期の婦人雑誌にイメージされた女性は「革命的運動家」、「啓蒙者」、「社会進出者・勤労者」であり、後期の婦人雑誌にイメージされた女性は「勤労者」、「作業ノルマの超過遂行者」、「叙勲者」、「代表者」、「優秀業績者かつ子だくさんの名誉母」であることが解明された。いわゆる社会主義モンゴル国家によって規定され、社会において要求され、さらに報道において伝達された理想の女性像とは、まず社会建設に貢献する勤労者であって、さらに労働業績が優秀者である他、多くの子どもを産み育てる「名誉母」であるべきことであったことが検討された。

第5章では、オーラルヒストリーの手法を借用し、社会主義時代を経験し、いまなお健在するごく普通の女性たちの語りに着目し、社会主義モンゴル社会は女性たちにとっていかなる社会経験であったのか、分析した。国家は社会主義イデオロギーの下、労働を愛し、国のために尽くすことを要求し、新たな道徳や価値観を生み出した。女性たちの語りからも、彼女たちが社会労働に対して厳格な態度を身に付けていたことが伝えられ、国を発展させるために専念し、ある意味、「国家と結婚」したような状況であったことが検討された。

社会主義モンゴル政府は、女性たちに生産労働力としての役割の他、労働人口を補充する「産む性」としての役割をも積極的に促していた。第6章では、人口を増加するため政府が実施した各奨励・規制・強制策に関して、中でも《名誉母》叙勲制を取り上げ、分析を行った。この人口増加のための奨

励・規制・強制策によって女性には妊娠・出産に関して選択の余地が与えられなかったこと、子どもが多いことが国家レベルでは奨励対象になったものの、個人レベルでは私生活の管理ができない人と扱われる要因につながったことが浮かび上がった。一方、育児は必ずしも産みの母親、又は女性に託されず、広範囲の親戚の分業によって実現され、育児形態の様々なバリエーションが存在したことも分析できた。すなわち、多産奨励の二重性、妊娠・出産の調整、育児と社会労働、育児形態に関して検討した。

本論で分析した内容から明確になった知見に基づき本研究の意義を次の第一から第三に提示した。

社会主義モンゴル社会に関する従来の人類学的研究には、この地域で営まれてきた牧畜経営、牧畜実践の社会主義化の過程、また牧畜集団化によって組織されたネグデルの運営やその諸相に関する内容が主であった。これに対して、本研究では牧畜経営以外の側面から、この地域における人々にとっての社会主義経験に関して考察した。言い換えれば、モンゴル地域における牧畜実践の社会主義化の過程という従来の研究課題とは異なり、この社会を生き抜いた人々、中でも女性たちが経験した社会主義社会の経験に焦点を当て、検討した。これが本研究の第一つの意義になる。

本研究では、社会主義経験者女性の当事者に聞き取りを行い、社会主義経験に関する女性たちの証言・回想を記録し、文字化した。また女性たちの生の声を分析の対象としながら、女性問題を意識し、多様な価値観から捉えることを試みた。さらに、社会主義時代のその当時に刊行されていた女性向けの婦人雑誌を資料として選び、分析を行った。社会主義イデオロギーの思想や意識が強く反映された社会主義時代のモンゴル女性に関する従来の研究視点(特にモンゴル研究者による)を克服し、女性たちの証言や語りから社会主義のモンゴル女性の状況を解明することを試みたことが、本研究の第二の意義にある。

性別役割分業に関する従来の研究では、男女の役割分業の形態に影響を及ぼす「権力者」に植民地支配、資本主義経済の浸透、開発対策を指摘することが主である。当然、社会主義政策も従来の社会に対する抜本的な改革を行う政策であることから、男女の役割分業に社会主義政策によって何らかの変化が生じることもあり得ることである。本研究の第三の意義に、男女の役割分業の形態に影響を及ぼす「権力者」の一事例に社会主義政策を取り上げ、分析したことを挙げたい。

以下、女性にとって社会主義モンゴル社会はいかなる社会経験であったのかを、本研究で取り上げる女性の役割分業の視点から指摘すると、次の3点に分類できると考えられる。

まず本来のモンゴル牧民男女の役割分業に存在した形態に変化が現れたこと、つまり「あったことが変えられたこと」に該当する。これは、かつての畜産業における牧民男女の役割分業の形態に現れた変化のことを意味する。すなわち社会主義時代の牧畜集団化によって家畜をカテゴリー別に分類し、管理することになった。この家畜管理上の変化によって大型家畜の世話が男性に、小型家畜の世話が女性にと基本的に分担されていた役割分業が希薄化されることになった。

次は、女性の再生産がよりいっそう促されたことつまり「あったことが促進されたこと」に該当する。伝統的な遊牧から近代的な農業および工業への転換を目指した社会主義モンゴル社会では、女性たちの自らが不可欠な労働力であった。その一方、必要不可欠だった労働人口を補充するため政府が取り組んだ人口増加政策にも応じなければならなかった。したがって、社会主義モンゴルでは女性の「産む性」としての役割がより強調され、出産という女性の本来の役割分業つまり「あったことが促進されたこと」になった。

さらに、社会主義的な近代化によって産業化が展開され、社会において女性の労働力が大いに要求され、女性は社会建設に動員され、女性の労働者階級が誕生した。家庭と職場が分離しない牧畜業に従事してきたモンゴル女性たちは、社会に出て働くようになり、家庭と職場が分離することになった。したがって、モンゴル女性の役割分業の形態に社会生産活動という、つまりかつて「なかったことが作り上げられること」になった。

最後に結論を述べたい。社会主義社会における女性研究には女性解放論や女性の社会経済活動と家事、育児の二重、三重の役割・負担が議論される場合が多い。筆者は、これらの議論より、この二重、三重の役割・負担に対する女性自身の認識の側面を重視すべきであると考え。女性たちの証言では、育児や家事に対して「仕事」として認識する度合いが低く、社会で働くこと、社会経済活動に対して「仕事」として認識する度合いが高かったことが分析された。育児や家事を「仕事」として認識する度合いの低い理由には、育児が必ずしも産みの母親、又は女性に託されず、広範囲の親戚の分業によるモンゴ

ルの育児方法が要因として挙げられるかもしれない。またこの育児方法は、本来のホトアイルの共同体における協業の方式の他、国家政策に順応するため、一般民衆レベルにおける非制度的な「対策」としても捉えられると考えられる。

女性たちにとっての社会主義モンゴル社会の経験に関して再検討すると、女性たちの語りには、家族成員の一人一人の人生イベント、記念行事に関する思い出、または日々の暮らしぶりに及ぶ内容が少なかった。それに比べて、女性が社会でどれだけ一生懸命に働き、社会に貢献したことがいかに評価され、表彰されたか、社会活動への回想が多く伝えられた。これには筆者の聞き取り方の甘さが挙げられるが、このように社会で働いたこと、仕事の実績が評価されたこと、名誉を贈られたことなど、社会労働に及ぶものこそが、社会主義モンゴルにおける女性たちの経験として検討されるのではないかと考えられる。女性たちは国家の指示通りに社会で働き、子どもを出産し、家族を持ち、つまり「国家と結婚」したような環境であって、女性たちの人生の喜びや生きがいが労働・社会で働くことに集中しており、その当時も、そして今なお労働に生きがいを感じ、モンゴル社会を生き抜いてきたといえよう。

論文審査結果の要旨

本論文は、社会主義時代モンゴルを中心に、文献資料の読解と実地調査による聞き書きに基づいて、当時のモンゴル社会において女性が担わされていた社会的役割の実態ならびにそれに対する当事者たちの評価・解釈について、オリジナリティーの高い分析と考察を行っている。データ分析の手法は緻密であり、論旨も概ね明晰であるとともに、全体構成もまた妥当であり、学術論文としての形式を十分に備えた論文であると言える。

第1章では、社会人類学におけるジェンダー役割に関する先行研究を整理するとともに、従来のモンゴル女性に関する研究動向を概観し、その中で社会主義時代モンゴルの女性の役割について解明することの意義と必要性を表明している。続く第2章では、社会主義化以前のいわゆる伝統的モンゴル社会における女性の役割や地位について、各種文献記録に拠りながら明らかにしている。第3章では、社会主義時代に牧畜の集団化により形成された生産小隊内で、飼育家畜を複数種から単一種にする専門化が計られたことにともなって、性別役割分業が後退したことを明らかにしている。続いて第4章では、社会主義時代に刊行された女性雑誌の表紙や記事内容の分析から、社会主義時代の各時期に国家により宣伝され期待された女性の役割や理想像について明らかにしている。また第5章では、社会主義時代を実際に経験したモンゴル女性たちに対して著者自身が実施したインタビュー調査をもとに、彼女たちが社会主義時代の経験を総じてどのようなものとして語ろうとしているのかを明らかにしている。さらに第6章では、「名誉母勲章」の分析を通じ、社会主義時代モンゴルの特徴的な制度であった多産奨励政策が当時の女性の生き方にどのような影響を与えていたのかを解明している。そして最終章では、これらの論点をまとめるとともに、モンゴルの社会主義政策が、男女の性別役割分業のあり方について大きな影響を与えたこと、それは植民地支配や資本主義社会における産業化、あるいは今日的な開発政策等から帰結する性別役割分業とは明確に異なる性格をもつものであったこと、そして当時のモンゴル社会を経験した女性たちが、概ねそれを肯定的ないしは美化した形で語ろうとする傾向があることを実証的に明らかにしている。

社会主義時代のモンゴルにおける性別役割、特にその中で女性に課された役割について、政策上のプロパガンダ、実態、そしてその時代を生きた人々の現在における語り、という3側面から綿密に解明している点で独自性の高い研究であり、社会主義社会研究／ポスト社会主義社会研究、ならびにジェンダー研究の枠組みの中でも一定の価値をもつ優れた研究といえる。考察がややコンパクトで控えめに過ぎる点で若干の物足りなさを感じさせることは惜しまれるが、その点を差し引くとしても、当該分野において高度なオリジナリティーを具備する研究として認めるに十分な内容であり、よって、本論文は博士(学術)の学位論文として合格と認める。